

第一百三十卷第一二四一號
令和四年十二月三十一日發行

弘道

第 1141 号

【巻頭の言葉】世界に日本の“DOUTOKU”を発信しよう

……………日本弘道会理事 押谷由夫

【「経済と倫理」鼎談】

出席者 元経済同友会幹事、本会理事

高坂 節三

早稲田大学名誉教授、本会副会長

土田健次郎

拓殖大学顧問

渡辺 利夫

【連載講座】日本人の道徳心（十七）……………高橋 文博

——『日本書紀』における天皇（下）——

令和4年 11～12月号

日本弘道会

「経済と倫理」鼎談開催

(令和4年9月8日(木)
於 日本弘道会会議室)

全景



出席者



高坂節三先生



渡辺利夫先生



土田健次郎先生

〔「経済と倫理」鼎談〕

「経済と倫理」の現状

令和四年九月八日（木）

十四時～十六時十五分

於 本会会議室

出席者（五十音順）

高坂節三先生

元経済同友会幹事、本会理事

土田健次郎先生（司会）

早稲田大学名誉教授、本会副会長

渡辺利夫先生

拓殖大学顧問

土田

このごろ、岸田内閣が「新しい資本主義」ということを言い、また、大河ドラマや新札とかもあって渋沢栄一に対する関心が高まり、更にコロナとかウクライナ戦争で世界的に経済が大きな打撃を受け、異例の円安も続いております。従来の文脈では解決できないこともいろいろ出てきております。

このような時にこそ、経済と倫理をもう一度きちんと問い合わせることが必要だということで、この鼎談が企画されました。



まず最初に、今の日本の経済に倫理はあるのだろうか。また、岸田内閣の新しい資本主義には経済の活性化だけでなく、経済を社会問題の克服に有効に利用しようという方向があるようにも思えますが、そこ

ではどういう倫理が求められるのか。それを話の発端にしたいと思います。

まず皮切りに高坂先生からお願ひしたいと思います。

高坂 渋沢健著『巨人・渋沢栄一の「富を築く一〇〇の教え』』という本を持つてきただんですけど

ね。渋沢栄一の五代目の子孫が書いた本です。彼は若手の経済同友会のホープの一人で、アメリカで育つて、長年向こうでいろいろな仕事をして、日本に来て自分で会社をつくつてやつているときに、『論語と算盤』^{そろばん}を勉強してみて、非常に参考になつたと いうのでこれを書いたんですね。

ただ、この新しい資本主義実現会議の緊急提言というのを読んでみると、あまりにも場を広くしきて、本当にこれは実現可能なのかどうか。これらを検討するということではあります。渋沢健さんは精神をよく捉えたら大丈夫だと言いますが、メンバーですから当然でしょう。

それと、これをつくつているメンバーの中でもう 1人、原丈人という人がいるんですけど、彼とも、もう三十年近く前でしょか、同友会の経済ミッショングでアメリカへ行つたときに、僕はまだ伊藤忠にいたので、何か一緒にやれないかという話をした ことをございます。



著者の渋沢健さんは、例の岸田政権の新しい資本主義実現会議のメンバーの一人です。彼がどういう話をしたか、今どういうことになつてているかというのもここに全部書いています。彼の立場からして当然ですが、この政策は非常によい、期待できるというのが彼のマンスリーレポートの骨子です。

そのときから彼は、どちらかというと、株主資本主義ではなく、公益に資するような公益資本主義でないといけないのでないかということを主張していましたね。それが今の時代に目に止まつた。公益資本主義というものが今度の案の参考になつているということは言われています。従来やつてきた株主資本主義のまゝ何としても儲けなければいけないという方向に対して、そういうことばかりではダメだということを言つてゐるわけですね。

もう一人、東大の偉いOBの人が、資本主義つて何だろうかと言つてゐる。資本主義は、単に資本・お金を集めてきて、それで事業あるいは企業を起こすことなのかな。いわゆるフリードマンなどが言つてゐる自由資本主義には、株主が全てコントロールできる組織であることが必要という考え方がある。だけど、その東大の先生の話では、そうではないんだと言う。株主が集まつてきて一つの経営母体ができるなら、その経営母体はいろいろな有能な人を集めて

運営するだろうが、これは株主の利益のためにあるものではなくて、一つの企業体そのものが何が正しいかということを考えしていくものでなければならぬ。この辺になつてくると、原さんの意見ともかなり似てきます。

今の大きな流れで言うと、株主資本主義に対しても、それはいかがなものかと言つてゐる人が増えてきているのではないか。これが今の流れだと僕は理解しています。

それから、もう一つは「三方よし」（編集部注：「売り手よし」、「買い手よし」、「世間よし」という近江商人の説いた商売の道）です。僕は伊藤忠に入つたので、入つたときから「三方よし」というのは教えられてきました。

大分前ですけど、瀋陽で国際会議があつて、しゃべつてくれと言わされたので、僕はこの「三方よし」という概念を言つたんです。あなた方は何かと言ふとすぐにWin-Winと言うじゃないか。Win-Win

では not enough° Win-Win の上にもう一つ Win をつける。Win-Win-Win でなかつたらいかんのだ、これが「三方よし」の精神だということを言つたら、「それはわかつた」と、中国人も含めてですけど、その会に参列していた人たちは大体理解してくれました。

そういうことから、倫理とは何かということになると、これは非常に幅広い話であつて、企業としては公に尽くせるものでなければ駄目だということです。

僕がアメリカにいたころ非常に問題になつたのは、そのころから株主の自己資本所有というのを認め始めたんですよね。これは大分古い新聞ですけども、平成十三年に日経で「曲がり角の米企業」というのが出ていて、ピーター・ドラッカーも株主資本のピークは過ぎたと言つたという記事が出ています。

日本の経営者やマネジメント層も大体みんなピー

ター・ドラッカーは読みますけれどもね。それから自社株の購入権というのがだんだん増えてきたんですね。そうすると、自社株の値段をずっと上げて、そして購入権を役員が持つていて、新しい役員を招聘するときに、給料いくら、それと自社株はいくら、その株を売つたらそれで儲かる、それも含めて収入になるということです。それをうまいこと使つたのがカルロス・ゴーンですけれども。そういうシステムが本当にいいのかということは、アメリカでもジエームス・C・コリンズなどは提言しています。

ちょうど僕がニューヨークにいたときには、急激に大きくなつたエンロンが、エネルギー部門でエクソンやモービルを追い抜こうというぐらいの勢いだつた。そのエンロンがやつたいろんなルールがあります。こういうことをしてはいけないと一般的に言われていることをもとに、社外取締役を過半数にするとか、監査役は第三者で中立の人間とするとか、そういうルールを全部決めたんですね。よく言われ

ているようあるべき企業の組織に全てあてはまる
ようなルールができていた。ですけども、結局はC
EOの言いなりになつてしまつた。そして、最後に
倒産をした。ちょうど私がアメリカから離れる前ぐ
らいですかね。アメリカでは一番大きな倒産でした。

ですから、アメリカでは何かと云うルールをつ
くればいいということをすぐに言いますけども、や
はりルールだけではないんですね。それは、最後は
言うなれば人だということです。

全然話が飛びますけど、前に亡くなつた文部大臣
をやつっていた人と僕とで教育問題について議論して
いたんですが、そこでも「結局は人やな」というこ
とで終つたんですけど、私にはやつぱりそれが一番
印象に残つているんです。教育委員会の改革といつ
ても、結局人なんですね。

ですから、同じように企業でも結局人だといふこ
とです。人材をどう育てるかということがちゃんと
できていないと云ふ。いろいろんなルールで

公平にやれと言つたつて、企業というのはそれだけ
ではうまくはいかない。企業は、責任感のある人、
公に尽くせるような人を上に持つてこないとどこか
で破綻するという気はします。

土田

ありがとうございました。渋沢健さんの講
演は、私も今春の孔子の釋奠(せきでん)（孔子祭）のときの湯
島聖堂での講演会で拝聴しました。中庸には奥深い
意味があるという話などをされていました。渡辺先
生、いかがでしようか。

渡辺

土田先生の第一の問題提起には、「岸田内
閣の『新しい資本主義』には、経済の活性化のみな
らず、経済を有効に社会的問題の克服に利用しよう
という方向があるようになります。ぜひ、
その方向に行つてほしいと思ふんでよ。

しかし、「経済の活性化
のみならず」と書いてあり



ますけれども、これ自体がもう成り立っていないんですね。日本の経済が長期低迷、デフレ不況に入つてもう三十年。「失われた三十年」と言うべきだと思うんですが、一人あたりの所得水準で見ても、もう日本は決して高い国ではないですね。賃金や給与水準で見ても、OECD諸国の中ではもうしんがりなんですね。韓国にさえ追い越されている。

のみならず、そうした経済低迷下で、昔は「一億総中流」などと言われておりましたけれども、これは明らかに崩れておりまして、日本はむしろ格差が非常に大きい国になってしまっているわけです。

経済学には「相対的貧困率」という指標がありまます。所得水準の低い者から高い者へ順に並べていったときの真ん中より下、中央値の半分以下の人々が何%かという比率です。これはOECDがやっているのですけれども、これで見ると、日本はアメリカと並んでOECDのボトムであります。

相対的貧困率をもう一度簡単に説明しますと、食えないわけではないけれども、大半の人々が享受しているような生活を送ることができない人々の比率というふうに言つたらしいと思います。日本はこれがアメリカと並んでOECDの中で最もひどい水準にあります。

しばらく前に『貧困大国アメリカ』という本が出来て、ついぶん売れたようですけれども、気がついてみるとわが国も「貧困大国日本」というふうになりかけているのではないかと思います。

九十年代の初期以降のほぼ三十年、ちょうど一世代の間、日本経済は本当に急な坂道を転げ落ちるようになってしまったのです。所得水準が低くなつたというのみならず、今言つたように格差が拡大しているところが非常に注目しなければならないところです。岸田内閣の新しい資本主義の本当のポイントがそこにあればいいのですが。

高坂先生も土田先生も私も、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代をよく知つてゐるわけですが。

私が教える学生たちは不況下に生まれてそのま
ま今日に至っているわけでありまして、ジャパン・
アズ・ナンバーワンのあのダイナミックな感覚を全
く知らない。ちょっとかわいそうだなという感じが
します。

今言つた相対的貧困率で表される格差の問題です
けれども、これはいろいろな格差につながつていま
す。今言い出したことで言えば、教育格差の問題が
僕は非常に深刻だと思うのです。

さつき一億総中流社会ということを言いましたけ

れども、あの時代は、日本人は中産階層への帰属意
識を持つていた。その意識はどこから生まれたかと
いうと、教育を通じて社会的上昇ができるという希
望が与えられていた時代であつたからだと思いま
す。どんな出身の人でも高等教育さえ得られれば、
ステータスアップをしていくことが可能であつた。
あの時代にはそういう希望があつたんですね。

ます。

たとえば、子どもの教育費用が今高いですね。
塾とかお稽古ごとといった学校外教育といったもの
の費用も非常に高いですし、それから、パソコンや
スマホにしても、結構高価格なものになつていま
して、貧しい人々は子どもにそういういい教育機会を
与えることがなかなか難しくなつています。

コロナと今の問題を少し結びつけてお話ししてみ
ところが、現在はそうではない方向に社会全体の

ベクトルが動いている。低所得者が自分のステータ
スアップをするチャンスに恵まれていない社会に
なつてきている。これは結構厄介な問題ではないか
と思います。

禍によつてますます厄介になつてゐる感じがいたします。

こういう考え方はどうでしようか。たとえば小学校でも中学校でもいいですが、特に公立小学校、公立中学校などはいろいろな異質な人間を受け入れる社会的容器ですよね。どんな所得階層や出身階層の子どもでも、全てを受け入れる社会的容器です。ところが、コロナによつて、休学、休校、ステイホームということになつて、この格差を固定化するようなベクトルをコロナが作り出しています。

低所得階層、母子家庭等々の貧しい子どもがステイホームを続けるということは、いかにも大変なことだらうと思います。そういう格差の問題をコロナが可視化して、かつ固定化しつつある。そういうことになつてゐるのではないかと私は見ていています。

もう一つは、職場のオンラインも格差拡大ベクトルを作り出しているのではないかと私は思うのです。コロナ以前では同一のオフィスや工場で、同じ

釜の飯を食い合うような感覚を持つて仕事ができたと思ひます。そういう意味で、職場というのは平等化へのベクトルを働かせる現場だつたと思うんですけど、これがオンラインになり、ステイホームで仕事をするということになると、容易な人もいるのですが、かなり多くの人は容易ではないんじやないでしょかね。家やマンションの小さな部屋で、いつもずっと家庭にいなかつた主人が帰つてきて、部屋に閉じこもつてオンラインで仕事をしてゐる。そういう状況ですね。豊かな人々はいいんですが、貧しい人々はそういうステイホームが容易ではない状況になつてきて、僕はオンラインも格差拡大のベクトルに加担してゐるとみています。

もとに戻りますと、やはり経済の活性化のみならんになつてゐるのではないかと私は見ていています。もとに戻りますと、やはり経済の活性化のみならず、経済を有効に社会的問題の克服に利用しようという方向性を岸田政権がちゃんと意識的に持つて、そのための政策にどの程度踏み出せるかどうかは未

最後に機会があれば申し上げますけれども、アベ

ノミクスの三本の矢のような明確な方向性が見えない。さつき土田先生も、いろいろあつてどこがポイントなのか分かりにくいとおつしやつていきましたけれども、私もそんなふうに思います。

コロナがもたらしたもの

高坂 コロナに対する考えは全く同感です。江戸時代の教育は、自分の家で部下と食事を一緒にすることによつてコミュニケーションをとつて、丁稚か^{でつち}ら全部育ててきたんですね。ところが、今は食事を一緒にすることが駄目なんですよ。

渡辺 でき niedisne.

高坂 やつと昨日は久しぶりに一部のグループと昼食を一緒にしましたけれども、それまでは大分気にしていましたよ。新幹線に乗ることも。やはりコロナについての政府の依頼があるので、できるだけ自粛しています。

渡辺 ディスタンスですね。

高坂 新幹線の中でもステイホームをしてくれるわざわざアナウンスしているんですよね。うちの職員に聞いたら、独身の女性で一間で生活している人がいますが、机もない。そこで段ボールを置いてやつていると。何かそういうのを聞くと、わびしくなつてくるんですよ。この二年間ブランクだつた影響は、会社の職員にもものすごく影響していると思

います。それで仕事がちゃんとできる人はある程度できるかもしれないけど、普通の人は頼まれたことだけやつているということになるんだろうと思います。そして、それを政府は推奨しているわけですから。

土田 そうですね。長期的な問題は当然ありますが、それとは別にコロナという短期的な問題でも終息までに三年間以上はかかる。昔のスペイン風邪は三年ぐらいだったそうです。三年間となると、中学一年生は中学時代が全部コロナ、高校一年生は高校

時代が全部コロナで、たとえば部活や校内活動ができないなど、生徒たちの成長に甚大な影響が出ます。

先生方がおつしやつてているように、ある程度のスキルとか人間的な力が出来上がっている人だつたら、逆にその経験や知力を生かして応用ができるけれども、子どもはそうはいきません。育ち盛りのときにそのブランクがあつた子どもたちのアフターケアというのが重要な課題になります。経済で人をつくるという視点からもこういうことへの応対を考えないといけないでしょ。

渡辺 コロナの感染症は結構暴力的な感染症です。私どもはコロナ禍の三年間、人と人との関係性を破壊され続けたわけですよね。僕は、人間の本質は人と人の関係性の中にあると思うんですよね。

society という言葉に初めて出会つて、これを日

本語に移しかえた人は福澤諭吉です。これを彼は何と訳したかというと、「人間（じんかん）交際」という訳語を与えました。人間と書いて「じんかん」

とルビを振つたわけです。その理由は、恐らく福澤は、人間というものの本質が関係性の中にあるということを直観したからだろうと思います。

以前読んだフランス・フクヤマの Trust は『「信無くば立たず』』というタイトルで日本語の翻訳も出ているんですけども、フクヤマはこの本の中で次のような文章を書いていまして、さすがだなと感服したことがあります。短い文章なので、ちょっと読んでみます。

「人間は、孤立していっては自己を完成することができない。親孝行や慈悲の心など人間にとつての最高の徳は、他の人間との関係の中で実践されなければならない。したがつて、社交性は個人的目的を達成するための手段ではない。それ 자체が人生の目的なのである」と。

社交が人生の手段ではなく目的だとフクヤマが言うのは、自分が道徳的な存在であることを他者から認められたいという欲望を持ち、この欲望こそが人

間を人間たらしめている本質的なものだと彼が考へてゐるということです。恐らく福澤とフクヤマは同じところを見つめている。

要するに、自分がこういう存在であるということを認知してもらいたいという「認知欲求」が、人間を人間たらしめているという見方ですね。われわれは自分で自分の顔を知らないですね。第三者という鏡に映し出して初めて、自分はこんな人間だつたというふうに確認しているわけです。つまり、他者に対する自意識とか他者の評価、対応、そういうしたものを見ながら人生を送つているんですね。

そう考へると、やはり人間の本質は関係性の中にある。その関係性を他のいづれの病よりも厳しく制限したのがコロナではないか。非常に毒性が強くて、全員が死んでしまうような、ペストやコレラのような感染症であればこんなことにはならないですね。弱毒性をどんどん強めていつて、その分だけ感染の範囲を広くしていく。これはコロナというウイルス

の生存本能だと言う人もいますけど、ウイルスに生存本能があるのかはわからないけれども、われわれから見るとそのように見えるわけです。

新型コロナウイルスは人から人へと広がっていく飛沫感染なんだから、人ととの接触ができるだけ回避しなさいということになります。密を抑制することが重要だというわけです。新幹線の中でもそういうアナウンスがあつたそうですけれども。

他者と会つて語り合つて一緒に飯を食うということは、人間の根源的な欲望ですね。そういうことをしなかつたら、人間じやないですよね。

土田 そうですね。

渡辺 そういう意味では、ワクチン接種をさらに加速する、あるいは服用できる薬の開発・承認といったことがもう少し迅速にできなかつたのか。日本の医療、医学、薬学がこんなにまでひどかつたかといふうにみんな思わされたのではないでしようか。

技術一等国で、格差のない中流社会だつた、かつ

てつくられてきた話は、恐らくみんな神話だったのではないかとさえ思われます。私は比較的オペ

ティミステイックに世の中を見てきた人間の方なん

ですけど、その人間をもそういうペシミズムに巻き込むようなひどい状況ですね。

これはコロナによつて生まれたというよりも、既にコロナ発生以前に起きていた事象が、コロナによつて可視化され、見えるようになつてきた。そういう面から言うと、コロナはとても重要な社会を眺める窓口になつてゐる可能性もあります。そういう検証やら評論やら議論がこれから出てくるのだろうと思ひます。

土田 コロナは一番の反省の機会になつた。

渡辺 そうですね。

コロナは、死亡者の関係で言えば、日本の場合、欧米ほど多くはないので、命の問題も大事ですが、それ以上に人間の社会性を殺していくことが問題ですね。

渡辺 そのとおりですね。

高坂 そうですね。

家庭と教育

土田 渡辺先生がおしゃつた「人間」という言葉は、中国では世間とかこの世という意味で、人といふ意味はありませんね。日本だと鎌倉時代ぐらいから人間を人の意味で使つていますが、伝統的に人と人の関係が大事にされていました。和辻哲郎は倫理は人と人の間で成立するということから『人間の学としての倫理学』という本を書いています。

それで、私は『国富論』で有名な十八世紀イギリ

スのアダム・スミスの『道徳感情論』を読んだときに非常に感心したのは次のような儒教とよく似た議論です。人は誰でも自然に人に良くしてあげたいという欲求を持つていて、しかもそれによつて相手から好意を持たれたいという気持ちがある。その上で、人に良くしたいという気持ちと、そのお返しに相手

が自分に持つてくれる好意の相互関係を中立公平に見る存在を心の中に設定して、その相互関係が適切か否かを検証をしてゆけということをスミスは言うのですが、これは一種の三方よしみたいなことなんですね。

アダム・スミスがみなが自己利益を追求してそれを放つておいても、需要と供給の自然に任せればおのずと調和すると言つたのは有名ですけれども、同時に彼はフェアでなければいけないということを言っています。富や名誉や出世をめぐる競争では、競争相手を追い抜くために全力をあげても良い。ただ、競争相手の誰かを突き飛ばしたり押し倒したりすれば、それはフェアプレーの精神にもとる行為であり、到底容認できないと言つています。人の心がわかり、それを正確に測ることができるのが眞の経済人であるということです。

ある意味で、商売も相手との交換ですよね。だから、三方よしみたいな、AとBという人の間で商業

行為があつて、しかもそれが周りから見ている人たちがいて、三者から見て適正だということが大事です。そういう呼吸というか、相手の気持ちをわかつたり、自分が相手にどう見られているかを推量するのは自分ですよね。スミスはそれを直接的観察と間接的観察とかいうことで言つてているけれども、そういう相互的なものを見る訓練が教育の中で本来必要だと思います。

だから、昔だったら若い農民が若衆宿わかしゅうやどにみんな入つて挨拶から学ぶとか、会津の武士みたいに什に入つて、子どもたちだけの間で相互に鍊磨じゅうがしあうとかして社会性の訓練を課していった。それが、家でコンピューターだけ前にすれば、経済人になる素地、訓練の期間をなくしているようなものかもしません。

私は寮のある中高の大学系属校をつくる仕事をしたんですが、寮の経営はものすごく難しいんです。ただ、そこで生徒たちが人と人の付き合い方の呼吸

とかルールを覚えるのが尊い。イギリスでもパブリックスクールでは寮教育が重んじられています。

ところが、日本では寮教育を担当する教員に社会的ステータスがないんですね。一番喜ばれるのは自衛隊出身者です。寮の経営を請け負う会社がありまして、そういうところが人を抱えていて、寮監を送つてくるんです。けれども、普通の仕事と違いますよね。夜もずっとといなればいけない。昼間はむしろ空いている。泊まり込みをしなければいけない。ずっとそこにいなればいけない。いろいろな問題処理をしなければいけない。そういう寮長とか寮監の仕事をもつと社会的なステータスと、それなりの報酬をあたえないといい人材が得られないですね。今は個人教育ばかりが中心になつていて、今度はコロナで個人化がますます進んでしまった。

私の祖父は幼少期に秋田の山奥で貧乏したので、机なんかはなくて、何かのあき箱を机がわりに勉強したらしいですね。ところが、今はコンピューター

が無ければできないし、それから大手の塾に通わせるにはかなりの金額が必要です。筆一本で勉強するというふうにはなかなかいかない。

さつき高坂先生も人が最後は問題になると言つていましたよね。恐らく金もうけだけではなくて、どういう人が金もうけをしているかでも信用度は違うだろうと思います。

徳倫理学 Virtue Ethics というのがイギリスで出てきたときに、ものすごく嫌な性格の人間でも規範さえ守つていれば善人と言えるのかと疑問を呈した。それで人間は納得するんだろうかということです。そういう教育問題と今の経済の倫理の問題は大きくなりんぐするように思います。

高坂 そうですね。おっしゃるとおりです。結局、寮の先生もそうですけど、学校の先生自体がある意味で目標を失つているというか。僕は江戸時代の寺子屋も行つたことがあるんですよ。そこの資料をみんな見せてもらつたこともある。

そうすると、結局、寺子屋で教える目的は、知識ではなく行儀作法だと。行儀作法がまずあつて、子どものけんかは子どもに任せておけと。母親は口出しをするな。先生に対しても、あまり縦社会が強すぎるといかんのかもしれないけれども、そのぐらい厳しく子どもに行儀作法を教えていたんですよね。そういうものが個人主義、自由主義になつてだんだん薄ってきた。とりわけ、第二次世界大戦の後は、家族なんていうのが解体された。

僕はたまたま経済同友会の憲法問題調査会の委員長をやつていたんですけど、そのときに憲法学の権口陽一氏などが、憲法で一番大事なのは十三条だと言う（編集部注・十三条の文章は「すべて国民は、個人として尊重される。……」）。それは、個人の尊厳を守るんだと。彼は昔パリにいたことがあるからそう言うんでしようけど。それで、「全然出てこないけど、家庭というのはどうなんですか」と言つたら、「あれは、戦前はむしろ桎梏だった」と。

あのとき、男女同権の原稿をつくったのはベアテ・シロタ・ゴードンさんというアメリカから来ていた人ですけど、そのゴードンさんにも僕は会いました。ゴードンさんが書いている『一九四五年のクリスマス―日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝』という本がありましたけど、そこでも家庭は人間が生活する基本の大事なものだ、そのため男女同権が必要だとちゃんと書いてあるのです。だけど、彼女は「残念ながらそのことはそこにに入れられませんでした」と言つていた。ベアテ・シロタ・ゴードンさんを偉い人にして、日本で映画までつくつている女性がいますけど、必ずしもその人たちが言うようではない。

女性の権利、権利、それも大事だけど、基本的にやつぱり家というものの存在を重視しないとね。独身で一生懸命有名になつている人もいますけれども。これは西村翁もおつしやつてゐるけれども、やっぱり個人を大事にすると同時に家を大事にする。そ

これから、近くの社会や国を大事にする。それで、余力があつたら外国に及ぶ。それが当たり前のこの段階を踏むことが全部忘れ去られて、もう何でもいいと。自由に何をしてもいいんだということになつてゐる。

個人が自由になると、どうしても豊かになりたいということで、利益をむさぼりがちになる。その利益追求は、先ほどから出ているようにちゃんと正義

といふか徳のあるやり方でやるならいいけれども、そう簡単にはいかない。人というのは、どちらかといふとエゴイズムの固まりで、うまくいかないとニヒリズムになつてしまふわけです。こういうことがやはり日本で起こっている一つの問題かもしけないと思ひますけどね。

個人主義の問題点

渡辺 私も高坂先生の憲法に対する理解は、ほとんど違和感なくうかがつております。

憲法二十四条が婚姻条項ですよね。要するに自由な個人と個人が結びつくのが婚姻であると言つてゐるのみ。そこには夫婦が共同体の中の基礎の基礎である共同体、家族の形成主体だということが一言も書いていないし、においもしないんですよね。家父長制的な家族に対する憎悪みたいなものがGHQにあつたからなんでしょうね。

GHQを引き継いでオピニオンリーダーのようにしゃべつたり書いたりしていた人々が、東大法学部の偉い先生だつたんです。その偉い先生の憲法論はまだ大学のテキストとして広く使われているんですね。拓殖大学ではそういうことはないですけれどもね。

現在の最大の問題は少子化だと誰でも考えます。しかし、この少子化をもたらしたのはやはり家族が消滅しているからなんだろうと思います。

では、誰が家族を解体したのかというと、われわれ自身だと思います。高坂先生は個人主義の問題を

今おっしゃったわけですけれどもね。

society を社会と訳したのは福澤諭吉だとさつき言いましたが、実は individual を個人と訳したのも実は福澤です。でも、どうも初めから個人という訳語が出てきたのではないらしい。「独一個人」が、初めてです。だけど、独一個人という訳語が通用するとは思えませんね。それで、使い勝手が悪いということで、独が落ち、一が落ちて個人が残り、最近では人も落ちて個になつた。そういうストーリーがあるわけです。

要するに、日本の伝統社会には個人というコンセプトがなかつたのではないでしようか。恐らく江戸時代には、自分が自分であることを証明するものは身分だつたろうと思うのです。もちろん同一の身分の中でいろんな共同体が存在するわけですけれども、個などというものはなかつた。だから、福澤も悶絶するほどの苦労をしてそういう用語を作り出しだらいいんですよね。

individual の真ん中に divide が入っていますよね。これ以上細分化できない、究極的な単位として個人というものがある。恐らく、福澤の頭の中にはそういう感じ方があつて、これを何とか漢字化しようと思つて努力したんでしょうね。つまり無理があるんですよ。伝統社会の自分のアイデンティティと、その後の近代的な日本人の間にはずいぶんギャップがあるということを society や individual は示している。

しかも、individualism も言つているわけですね。イズムとはつまり規範でしよう。個人主義という言葉を人々は平氣で使つていますよね。イズムとなつたらもう社会的な規範になりますから、もう身動きがとれなくなっていますね。

それで、コロナとの関係で申し上げれば、この個人、つまり関係性を失い、どこにも帰属するところがなく、寄る辺のないような人生を送つてゐる現代人にとって、この感染症は非常に怖いものだつたと

思います。悩みやつらさを共有できる人間関係の薄い社会になつていますよね。しかも、オンラインになり、休校になり、ステイホームになる。

土田 そうですね。コロナは自分がかかれば、もう赤の他人だろうと親だろうと、うつる人間はみんなうつりますから、ある意味ではかかつた人間が敵みたいにみんななつてしましますよね。だから、家庭の中で濃厚接触になつた場合には、なるべく手洗いとか風呂とか別にして、部屋の中にずっとといなけれいけないという指示があつて、ますます分断もいいところになつてしましましたね。

中高の寮は、家族から離れて生徒たちが入るんだけれども、問題を起こす子は大体家族が破綻しているんです。逆に、家族がうまくいっているところの子は、寮に入つてもうまくできるんです。

親御さんがなぜ寮に入れるかというと、自宅が遠いということ以外に、子どもを頼りなく思つてゐるから社会性を得させようとか少し鍛えようと思うか

らです。また親が仕事でしょつちゅう転勤するという理由もあります。

ところが、寮でうまくいかないのは、親が自分を遠ざけようとして寮に放り込んだのではないかと子ども自身が思う場合ですね。つまり、家族の和というのがないケースですね。たとえば、お父さんが再婚して家庭内がギクシャクしていると、寮に入れさせられた娘さんは自分を遠ざけているのではないかなどと思うのです。そのような不信感が寮生活に対する姿勢にも反映してしまうのです。もちろん親が再婚していても、それでうまくいつていればそんな問題は全くなくて、自分のためを思つて寮に入れているんだと子どもも思えるのですが。

やはり家族というのは、一番いい社会訓練の場ですね。濃密な、ある種、甘えることもできる社会ですが、それがより関係の薄い甘えられない外の社会に徐々に拡大していくわけですよね。だから、家庭でこそおのずと自然に社会性の訓練ができる、それをもと

に社会性を家族、ふるさとの人たち、日本人、外国人と、連続的に広げていけばいいわけですよね。

たとえば中国や韓国の企業だと、家族で固めてしまって、もう家族個人主義みたいになってしまいますよね。日本は家族個人主義でもない。土地の中で貢献しないような家族や個人はやっぱり喜ばれないし、自己達成もない。明治のころだって、貧乏だけ頑張つて大学に入つて出世するぞといつても、そうすれば親を喜ばせられるのはもちろんですが、それを越えて応援してくれた学校の先生や地元の人たちも喜ぶとか、立身出世であつても、自分や家族を中心の利益だけではないですね。

渡辺 その点、ひよつとしたら長子相続性と関係があるかもしませんね。

土田 家族の形態の問題も大事ですね。

アジアの企業

ましたけれども、ほとんど長子相続。日本とずいぶん違う。今の日本とは違うけれども、戦前の日本ともずいぶん違つて、江戸時代の日本とも違うんじやないでしようか。

土田 韓国の財閥つて御家騒動ばっかりやつている感じがありますね（笑）。

渡辺 ありますね。そこに典型的に表れているわけですね。あんな世界的大企業が、財閥内で経営陣がけんかしているわけですね。そういうのはちょっと信じがたいですね。信じがたいというか、韓国を見ていると、いろんな現象で自分の反対の鏡を見ているような気がしますね。

土田 中国の企業なんかも、今の世代が替わらないとわからないかもしませんが、基本的にみんな同族だけで経営陣は固めてしまうのが普通なんですよ。

渡辺 そうですね。さつき韓国財閥のケースが出

そうでしたけれども、その後を継いだ今の共産党政

権のものとの国営企業が同族企業であるかどうか。

そういう切り口で考えたことは私にはありません。

高坂 そこまでは僕も分かりませんけどね。

土田 日本の場合は、家族というのは大事だがそれだけで閉じない。儒教も本来そうで、斎家（家の内部をととのえる）から治国、平天下と拡大しなければならないのです。放つておいたら中国なんかみんな家族本位になっちゃうから、それを拡大しないと儒教の味は出ないわけですよ。日本は大体家族を基礎にしてそれを拡大して、より公のためにという意識を植えつけていきますよね。

渡辺 中国で同族企業グループのようなものが生まれてくる可能性はあるでしようね。共産党に上がりを全部吸い上げられるようなやり方に、中国の企業が恐らくは耐えられなくなつて、防衛のためにそういう方向に出ていくと思うんですよ。

既に、習近平とジャック・マーのいきかいの中に典型的に見られていると思うんですけども、習近

平はマーさんのようなどでかいグループができるとということを、一面ではもうけを吸い上げながら、他面でそれを抑制しようとしている。

土田 たとえば渋沢栄一みたいに民間の活力を思い切り伸ばして、軍人とか官とかと並び立つぐらいにするというふうにならないといけませんが、中国は無理ですよ。

高坂 そうですね。

グローバルな経済倫理はあるのか

土田 国ごとに価値観とか体制が違つていて、そこでグローバルにやる場合に、経済倫理というのは、ルール化はできるものなんでしょうか。

高坂 それは非常に難しい。特に僕の経験で言うと、難しいと思うものは、石油・天然ガスとか地下資源があるところは腐敗が起こりやすい。というの

は、彼らにとつたら不労所得なんですよ。

からね（笑）。

高坂 苦労して何かをつくってきたという過程を経ずして、出てきたものの権利を奪おうとするとき出てくるのが汚職なんですよ。僕は中国でも仕事をしましたが、ともかく中南米の場合の一番の問題はそういうシステムに国として出来上がっていることです。アメリカはまだ何やかんや言いながら、ピルグリム精神（編集部注：イギリスからアメリカへ渡つた初期移住者の清教徒精神）がある。あれも多少問題があるけれども、国をつくる理念としては生きている。けれども、中南米の場合はそれこそピサロじやないけど、スペインとかポルトガルから略奪のためにやつて来た。ポトシ銀山とかいろんなものがありますけど。そういう国と仕事をする場合によほど注意しないといけないのは、そういう既得権益を守るためにやつている政治家につながっている。そのような相手には十分注意しないと、こっちも巻き込まれる。

ほかでもそうでしょうけれども、努力してつくつてきたものに対する割にそういう影はない。だけど、掘れば地下から出てくるものがあるとその影がある。ブーチンもそうじやないかと思うけど。そういうところとどう付き合っていくかというのは、よほど注意をしなければいけない。

土田 今、世界経済に倫理はあるのかというと、無法地帯もあるという（笑）。

日本型、あるいはアジア型の経済倫理についてですが、経営者と雇用者と社会の関係がそれぞれの地域の価値観などと密接に組み合わさっていると思うのですが、渡辺先生、たとえばアジアの経済で、中國でも韓国でも日本でも、それぞれアジア型の経営理念とか経済倫理とか、そういう特色は国ごとにありますのでしようか。

渡辺 難しいですね。

土田 否応なしにグローバルの中にみんな突っ込まれてしまつたのですが。

日本型経営とは

と言われたてのところでしてね（笑）。もう時代が違っているのかなと思いました。

渡辺 日本型、あるいはアジア型の経済倫理といいますと、欧米のそれと比べてどうも儒教的な影響力が強いとは言えないでしょうか。日本は朝鮮や中國と比べると同族的・血族的因素から離れているとは思いますけれどもですね。

土田 そうですね。実は大学が新しく五十歳以上の社会人学級を作り、私が社会人相手にクラスワークをしなければならなくなつたのですが、そのクラ

スで私が日本の終身雇用について、近年は終身雇用に対し否定的な意見も多いが、ロンドン大学教授で日本型資本主義ということを言ったロナルド・ドーアやアジア人初めてのノーベル経済学賞受賞者のイニンド人のアマルティア・センなんかは日本ではそれがむしろプラスにも働いていると評価したし、現在でも終身雇用というのはまだ多くあるんじゃないかなと言つたら、出席者たちに「もう時代は違いますよ

（28）

するかというのは経営の根幹もある。稻盛流のア

メーバ経営というのは、小さい組織にして、そこでやっている人たちが相談をしながら自分の部門を良くするようにする。そういう方法を彼は考え出したんですね。

それは、理にかなっているんだろうと僕は思つているんですけど。だから、稻盛さんが最初に成功した理由の一つはアメーバ経営で、職員のやる気を起こさせやすい。

ところが、アメリカ的経営というのは流れ作業をどんどんさせて、効率を良くすることを考えていき

ます。そうすると、自己抑制を期待することの方がかりが大きくなつて、自己実現のチャンスを相対的に減らす。だからそういう意味で、日本でもモーレツ企業というのははたしていいのかどうか。それはこれから問われていくと僕は思っています。

土田 たとえば職人の世界みたいな一つのスキルをずっと磨いて、それで名人になっていくみたいな

発想はあるのでしょうか。

高坂 そこまで稻盛さんが考えられていたかどうかはよく知りませんけれども、実際仕事をしている人を小さい組織に分けて、そこでやる気を起こさせていたということは間違いないと思いますね。

渡辺 今日は経済と倫理ということなので、自分の書庫に入つて、このテーマに合う文献はないかと捜していたら、稻盛さんの『人を生かす 稲盛和夫の経営塾』というQ&A形式の文庫版がでてきました。

高坂 ありましたね。

渡辺 どこのページを開いてもおつしやつていることは、会社経営においてまず必要なことは、トップが何のためにこの会社があるのかを従業員に明晰な言葉で示し、これを経営者と従業員が共有することが重要だというご主張です。もう一つが、経営者は社員の心を共鳴させる経営理念を持つていなければならないということですね。

また、会社は従業員の幸福を追求する、従業員を幸せにするものでなければならぬ。この辺りは、恐らく渋沢栄一の影響もあるのか、あるいはどこかにつながっているのかもしれません。そういう企業になれば、利益至上主義に陥ることもないし、不祥

事に巻き込まれることもないというのです。そういう主張を中小企業や零細企業等の社長さんの塾でやっているんですね。ものすごく人気があつたらしいですね。

高坂

そうですね。従業員のやる気を起こさせるための一つの手段として、アメーバ経営というのを打ち出したのだと僕は思いますけど。

渡辺

自己犠牲よりも自己実現の方を常に高める

ということですね。

土田

ロナルド・ドーアのものを昔読んだときに、高度成長期ぐらいのときの話だと思うんですが、日本人というのは自分の会社はずつと続していくものだという前提で、終身雇用の中で忠誠を尽くすとあ

りました。江戸時代は武士は必ず藩に仕えていたし、商売やつていれば養子をとつてでも代々続けていくところが社会的にも信用を得て、農民でも商人でもそれでずっと胸を張って生きられる社会ですよ。

稻森さんは恐らく社員が京セラから他に移ることを考えないように期待した経営だと思うのです

が、今はどんどん転職が当たり前になり、そのようなのは崩れています。これはどうなんですか。

渡辺 崩れているのだと思います。

土田 そうですか。

渡辺 終身雇用、年功序列という日本型企業の慣行が崩れています。特にデフレ不況三十年の中で、とてもそんなのんびりしたことはやつてられないというふうに経営者も考え、経団連も考え、ジャーナリズムも考えて、小泉改革があって、そういうプロセスでなってきたんじゃないで

しょうかね。

でも、コロナ禍の影響もあって、それはやつぱり

行き過ぎだという観念が生まれてきつつあるのでは
ないか。終身雇用、年功序列をネガティブに評価す
れば、九割ネガティブに評価できるんですが、ポジ
ティブに議論する姿勢がないのは残念ですよね。

関係を持ちたがらない若者たち

高坂 ここは難しいところです。たまたまコピー
を持つてきましたんですけど、10月号の『Voice』にのっ
ていた「失われた日本の道徳」という特集です。

渡辺 はい。

高坂 その中で田坂広志さんという方が「新し
い資本主義」で甦る日本型経営」という文章で、日
本型経営はいいんだということを一生懸命主張して
いるんですね。僕は全てに賛成というわけではない
んだけど、ともかくそういうことを言うような記事
も出てきた。一部でそういう日本の良さを見直そう

というところもあるんじゃないかなという気はしま
すね。

それと、大分昔ですけど、山崎正和が『柔らかい
個人主義の誕生—消費社会の美学』を書いたんです
よね。組織が大きくなっていくと、その中で孤立し
た群集が出てくるんですよね。リースマンなんかも
言つていました。そうすると、仕事は横へ置いてお
いて、遊び人間になつていくと。そういう大きな流
れは今も続いていて、結構漫画とかのいろんな方に
うつつを抜かして、仕事は適当にやろうという人も
増えている。

最初に渡辺先生がおつしやつたように、貧困率が
高くなつてているのは事実ですけれども、じゃ、絶対
に生きていけないかというと、僕は海外をずっと旅
行して帰つてきて本当に実質的な日本の豊かさを感
じますよね。困つたら、コンビニに行つて百円か
二百円のものを買ってこれば生きていけるんです
よ。ですから、どこかに今の若い人にはそういうう甘

えがあるんじやないか。

僕らはとにかく何もない、集団疎開で行かされて、食べるるものもない時代から来たから、しゃにむに働いた。それが懐かしいと言えば懐かしいけど、あんな苦労は今の若い人に言つたつて分からんじやないかなと。あの終戦直後から七十七年ですよ。

だから、今の若い人と会つて話をしても会話が通じない。向こうが言つてくる人の名前も全然僕は分からぬ。こういう世代になつたのかなと。

ジャニーズとか何とは次々出できますよね。ああいうのをまた生み出す組織というのが出てきているけど、そういうところへ行きたい人は増えこそすれ、減りはしない。逆に、苦労して企業でコツコツやっていこうという人は相対的に言えば減つているのかなという気がしますね。

渡辺 何事によらず、コミットメントが嫌なんですね。

高坂 そうですね。

渡辺 ええ。僕の世代では、大学の中でゼミというのは一つの重要な居場所だつたんですけど、今は違いますね。できればあんな面倒くさいことはやりたくない。卒論など、できれば書きたくない。コミニメントの気運がきわめて少ないです。何事によらず何かにコミットすることに対する忌避感が強まっていますよね。人と人の関係性が重要だと言つたつて、そんのは彼らの頭の中には定着しないんでしょう。

土田 今、大学では学生はコンパとかああいうのは喜びませんもんね。そんなのより親しい仲間とだけつきあう。余計なことで気を使いたくないという。はつきりしていますよね。

渡辺 そうですね。ある意味では、彼らの生活の範囲が広がつたとも言えるんですね。大学のゼミというのは、彼らの生活の中のほんの一部になつてしまつて、さつきの寮の話じやないですけど、あれは寮生活が全てだという時代の話じやなかつたでしょ

うかね。現在は、多様性と言えば格好はいいんですけど、コミットメントができなくなつた。あるいはコミットメントするにしてもいろんなものにコミットメント、多様なものにコミットメントしていくというふうにも言えますけどね。

土田 自分が匿名で楽しみたいみたいのがあります。それと今うるさいのが名簿ですね。たとえば大学でクラス担任になれば、当然学生全員の名簿を作らせみなに共有させようということになります。ところが名簿をつくつて配つてはいけないんですよ。個人情報保護だから。

高坂 あれも問題ですね。

渡辺 おかしな話ですね（笑）。

土田 名簿をつくつてはいけない。またたとえば大学院の入試は、今は早めに合格発表をしないと学生たちが就職の方を進めてしまつて大学院に来ないから、秋口の前ぐらいにもうやつちやうんです。そ

うすると、翌年四月の大学院入学まで半年の余裕がありますよね。そこでその期間を利用して、他学部や他専攻出身で学部時代に専門的な訓練を受けてない学生に課題図書をたくさんあたえて入学前に読ませ、大学院の授業についていけるようにしよう考えたわけです。そして合格者に連絡したいからメールアドレスを教えてくれと事務所に行つたら、個人情報で教えられないって言うんですよ（笑）。大学院で私のゼミに入るのが決まつてる人たちでしようと言つたんですが。しょうがないから教務の方に行って相談したら、私のアドレスを向こうに知らせて、向こうからこちらに連絡させるということになりました。

要するに、そういう個人情報だ、何だつていうのばつかりで、さわれないんですね。

高坂 あれも何とかしてもらいたいですね。

大学院の入試は、今は早めに合格発表をしないと学生たちが就職の方を進めてしまつて大学院に来ないから、秋口の前ぐらいにもうやつちやうんです。そ

うすると、翌年四月の大学院入学まで半年の余裕が人情報は出せないと言うんですね。そういう問題は

ありますよね。

渡辺 あります。全くそうですね。さつきの個人に通じる話ですけども。

高坂 そうですね。

渡辺 ひどい話だと思いますね。何かみんなで寄つてたかつてこの社会の関係性を。

土田 薄めている。

渡辺 うん。ぶち切つてやろうという。

土田 前、シンガポールに出張したときに、国立

大学の人と話していたら、あそこは華僑が牛耳つている国ですから、アラムナイ（校友）の情報を集積して、校友のネットワークを組織し、世界中の校友たちにそれを利用させるんです。あれは戦術ですよね。

高坂 そうですよね。

土田 そういうのもできなくて。

渡辺 あれは華僑のサバイバル戦術ですよね。

高坂 そうですね。

渡辺 関係性を持つのがね。

土田 はい。

高坂 僕は今、京一中洛北高校同窓会長なんですが。ところが、その名簿がなかなかそろわないです。特に若い人を入れようとしても、うまく連絡が。

渡辺 いや、おつしやるとおりだと思いますね。

高坂 卒業年次でおのおの卒業するときに名簿をつくらせているんでしょうけれども、どうも連絡がうまくいかない。

渡辺 いやあ、ひどい社会ですね（笑）。

土田 そんなに深くコミットする必要はないけれど、安全なグループであればそれに加入し、いくつかの異なるた世界を持っていたほうが、生きていく上でも余裕が出るんじゃないですかね。

それが何か社会性が妙に薄まっちゃって、みなボツンといふ。さつきの家族の話なんかでも、ほとんど核家族化しちゃって、一方では母と子の関係が妙に極端に濃密で、片方では外部はみな單なるよそ

者という具合で、濃密と希薄の極端な世界ができる

ちゃついていて、なだらかな中間地帯が無いという感

じですね。連続的な関係性がうまく築けない。

高坂 広い意味の規範がバラバラになつてきてい

るんですね。

土田 そういう中で経済の倫理ということになれ

ば、当然雇用者側とともにそこで勤めている人たちの価値観も問題になりますね。会社に勤めている人も、商売をやっている人も、きちんと仕事をすることで自己実現して、それが自分のプライドにもなるし、社会的にも評価されるし、お嫁さんも来てくれるというようなことが大事だと思います。いわゆるIT長者ばかりがモてる世界じゃないような（笑）。

高坂 おっしゃるとおりだと僕も思いますけどね。

土田 社会の目自体ももつと上がつていかないといけないんでしょうね。やはり教育問題が大事になるのでしょうか。

岸田政権の「新しい資本主義」

渡辺 この一世代の間、日本の経済は坂を転げ落ちるように低落してきたわけですけど、このデフレ不況においては、民間の活力をどう生かすかというテーマは成り立ちにくいと思います。

現下の物価はともかくとして、長年にわたり物価下落が続いていると、もちろん売上高が減少する、借入金の返済負担が大きくなつて収益が減少する。そうすると、従業員の首切り。首切りとまではいかなくとも正規社員の非正規社員化という現象がきわめて広範囲に広がつていく。

そうなると、もちろん新規雇用の採用の比率はどんどん下がつていく。第二の就職氷河期が来ないとも言えないですね。第一の氷河期の人たちはもう中年期から高齢期に入ろうとしていますね。老後の生活をどうやって維持するかという大問題を日本はしおつているわけですね。いろんな世代の中で、就

職氷河期の第一期生の大きな固まり、これが社会的不満や、ひょっとしたら憎悪を生み出しているもののベースになる。

私は、もう一つの固まりがこの三十年の間に起つてきている可能性があるんじやないかと思うんです。そういうものをちゃんと見つめて、新しい資本主義論が今度の新政権の中で本当に出てくるのかどうかが非常に気になるところです。

アベノミクス、これは高坂先生に伺つた方がいいのかな。あいう政治の世界では、前の政権がアピールしたものを受け継ぐことはできないんでしょうか。新しい資本主義論というのを、さつきもあつたように、何か言葉は新しいですけれども、アベノミクスの三つの矢に比べるとずいぶん空疎といふか、軸にあるべき岸田さんの思想をあまり感じさせないんですけどね。

高坂 僕はよく分かりませんけれど、あれを見ていて、新聞が書き立てる今の問題点を全部拾い上げ

て、これとこれとこれが問題だと言う。それならどうするのかが問題です。最初にちょっと言いましたけど、そこになると、縦割りの官僚の問題もあるし、それから財政の逼迫ひっぱくもあるし、優先度をどうつけてやつていくのか。これが岸田政権の目玉だ、というのが今は読めていない。それをこれから渋澤健や原丈人がやるかどうかは知らないけども、期待はしたいんですけども。まあ、あまりにも何か新聞で話題になつたことを全部拾い上げて書いたなという印象なんですよ。

渡辺 網羅的ですね。

高坂 本当に網羅的で。だから、それをどうやつていくのか。期待はしたいんですけど、難しいなと。僕があいう立場だつたら、とても難しいなと。

それから、田園都市構想は大平さんのを持つてきただすよね。大平さんは立派な人だと思いますけど。だから、あのグループで勉強してきたことが何だつたのか、それも徐々に分かつてくるのかもしけ

ませんけど。

ただ、民意を聞くだけじゃ具合が悪い。その辺、多少心配ですけど。では、野党がちゃんとやつていいかといったら、それこそ稻盛さんが心配していました。あのころよりももつとひどい。だから、そういう意味では、しばらく日本の将来に対するペシミスティックにならざるを得ない。

じや、何からやるかというと、またさつきの話に戻るんだけど、やつぱり徹底的に人をつくるということしか今はなかなんて思つたりしていますけど。

「だからどうした」という話ですね。やつぱりどこのスイッチを押すと全部がうまく起動を始めるのかというのが肝心ですね。教育なら教育。

アマルティア・センが書いていますが、とにかく

渡辺 そうですね。一番意思決定が必要な時期にそれができていないです。ああいう事件が起こつたからやりにくいという要素もあるんだろうけど、ならば一層、強力なリーダーシップをもつて実行していかなければならないわけですね。あまりにも網羅的で、よく見るとみんな言つてるんですよ(笑)。

日本があれだけ成功したのは教育に尽きるということです。あれがアジア全体に自信を与えてくれたと。彼はもともとインド人ですが、インドでもどこでも、教育さえきちっとしていれば欧米に伍せる。

それからこれもセンが書いているのですが、たとえば有名なアメリカのジョン・ロールズの正義論とかアメリカのポリティカル・コレクトネスみたい

渡辺 ええ。何でもかんでも言つてる。

土田 そうですね。

土田 このごろは下火になりましたが、一時は大学入試で小論文が隆盛でした。その入試問題は、大体国際化とか環境問題とか五つぐらいのテーマが主流で、予備校も全部その対策をやつていた。それが今度の新しい資本主義にはほぼ全部それがある(笑)。通り一遍の作文は慣れていてできるんですが、「だからどうした」という話ですね。やつぱりどこのスイッチを押すと全部がうまく起動を始めるのかというのが肝心ですね。教育なら教育。

日本があれだけ成功したのは教育に尽きるということができていないです。ああいう事件が起こつたからやりにくいという要素もあるんだろうけど、ならば一層、強力なリーダーシップをもつて実行していかなければならないわけですね。あまりにも網羅的で、よく見るとみんな言つてるんですよ(笑)。

それからこれもセンが書いているのですが、たとえば有名なアメリカのジョン・ロールズの正義論とかアメリカのポリティカル・コレクトネスみたい

なもの。ああいうのは自由とか個人の尊厳だとい

うのを無条件に肯定してしまつて、それで現状を

チェックしてあれは駄目だ、これは駄目だといふこ

とを世界中に言つて歩くというものだと。

やはり大事なのは教育

しかし、これだけ世界は多様なですから、まず当面の問題、たとえば奴隸制度をどうするかというのが問題であれば、それをみなで議論して改善について合意を得るというようなことをする。つまり、絶対的な真理を簡単に立てて、自由が大事だとか平等だとかで裁断しないで、もつと大事なものが状況によつては出てくることもあるのだから、むしろ、現実から出発してそれを前よりも相対的により良くしていくという努力をして積み重ねていくべきだと言うのです。

土田 もう時間ですが、最後にぜひこれはということを高坂先生と渡辺先生に一言お願ひしたいのですが。

渡辺先生は学長や総長をずっと経験されていて、文字どおり高等教育の表も裏もご存じだと思うんですけども、やっぱり今の教育の状況は経済にも好い影響をあたえないでしようか。現状の問題でいかがですか。

あるいはベースをつくるのは、高等教育では遅いんでしょうか。

高坂 そうですね。

土田 そして、そのときは英米中心だけじゃなくて、いろいろな地域の人たちから合意を取るようにすべきだとセンは言う。これはアジア人ならではな

いのかなと思つて読んだんですが。

高坂 いや、大賛成です。

リーのようなところから出発しないと、ちょっと動かないんじゃないでしょうか。

社会に貢献するために何かの資格を取ろうとか、何かの技術を習得しようという話とはちょっと違うような気がしますね。技術・資格ではなくて、もつと根源的な問いというものをやる。昔の旧制高等学校はそうだつたんですよね。

高坂 そうですね。

渡辺 今でもリベラルアーツなんて言葉だけはありますけどね。

土田 私はよく知らないんですけども、アメリカ

カのリベラルアーツの教育つていうのはかなりたいへんで、翻訳でもよいのですが、プラトンとかホメロスとかカントとかああいう大きな古典をバンバン読ませるかなりハードな教育だという話です。日本だと新書本をいくつか読ませるとかで全然違うんだと聞きますが、どうなんでしょうか。

渡辺 高校の教科の繰り返しみたいなところがあ

りますね。一般教養のための委員会や、そのための教員組織等があつて、よく顔を出していましたけど、ちょっとこれじやあと感じてはいました。

土田 私も学術院長時代にそれまでの二つの学部を新たに再編しました。そのうち新しく作つた文化構想学部は時代の要求に合わせてオープンな科目設定にしましたが、一方の文学部の方には伝統的なデイシプリンを残すようにしました。結局、学際的にすればするほど全部の授業が入門にしかならなくなるんですね。

渡辺 全くそう思いますね。

土田 オープンを標榜する学部では、授業の履修がフリーなため、参加する学生たちが学んでいる言語がばらばらなので、授業で使える言語が日本語と英語だけになつてしまふ。ドイツ語とかフランス語とかロシア語とか中国語とか各種古典語の原典をみつちりと読み込むという演習ができなくなる。そのことを当初から懸念したので演習を入門性のもの

と専門性のものの二段階にするというような専門性維持の仕掛けを提案していたのですが、私の任期が終わった後、曖昧になつてしまい実現しなかつた。

渡辺 レベルがどんどん落ちてるんですね。

土田 専門教育が衰退しますね。きちんとした

コース料理ではなく、アラカルトのまざいバイキングを食わせているようなもんだなと思うときがありますね。どうなんでしょうか。

高坂 いや、土田先生、おつしやるとおりですよ。

渡辺 同じような感覚ですね。

高坂 僕は客員教授でゼミを持たせてくださいと言つたんです。それで、一つの講座は人に譲つて、僕は国際資源環境論とゼミ。卒論なし。だけど、就職のことになると、みんな「先生」と聞いてくるんですよ。だから、何に興味があるのかなという気はしますけど。

それでもゼミ生と一緒に生活したというのは良くて、外国から来た人も選抜に必ず入れる。中国から

来た人で上海生まれがいて、それでは全員上海へ行こうということになつた。おまえが案内せえと。もう喜んでやるし、いつも出てこない学生まで参加していく。だから、そういうインセンティブというか興味を引くことをやりました。

それから、工場見学も行きました。カルロス・ゴーンが来る前の日産自動車の工場も行きましたけどね。やっぱりそういう教育が本当は必要ですね。そういうところで一緒にやっていて、僕は「先にホテルで寝ているよ」と言つて、翌日「昨日はどうやつた」と言つたら、「明け方まで飲んでいました」とかね。そういうのだけ思い出に残る(笑)。教えたことは全然覚えてないんですけど。しかし、それは大事だと思うんですよね。

土田 そうですね。そういう教育をしないと、年取つて学生時代の思い出として浮かんでくるのがコンピューターの画面だけとか(笑)。先生、何か最後にありますか。

高坂 最後に、イザヤ・ベンダサンの『につぽん

の商人』という本があるんですよ。彼が言うのは、

徳川式商人国家、これが現在の日本であるが、曲がり角に差しかかった今、難局を克服した江戸商人の知恵が真価を現すときだと。彼は江戸商人のことを書いているのですが、僕も伊藤忠にずっとお世話をなつたから、言われていることがよく分かるんです。

日本は、構造から言うと、基本的に貿易でしか成り立たないので。だから、僕も商社に入つたんですけど。それをもう一度見直せと彼は言う。自分が教

えていたことが皆書いてある。それこそ江戸の時期の日本の思想、これはもう土田先生がお詳しいんで省略しますけど、石田梅岩のこと、更に伊藤仁斎のことまで書いていて、自分なりにきちんと調べてあります。これで言わると、なるほどなと思うことが多々あります。今すぐ全部これをというわけにはいかないのしようけど、やっぱり彼は大したものですね。

ないですよね。

高坂 そうですか。

土田 ええ。もつとも『日本人とユダヤ人』や、山本七平（編集部注：ベンダサンは山本のペニーム）名義のはまだいろいろと文庫に入つてはいます。たとえば『勤勉の哲学』とか。

高坂 意外と皆さんご存じないのかなと思つて持つてきただんです。

渡辺 いや、持つていました。

土田 伊藤仁斎も面白いことを言つています。これは『孟子』に出ていることですが、相手に対しても仁愛をあたえても、相手が一向にそれに反応してくれないときは、相手を責めるのではなくて、自分の仁愛の方に欠点があるんだと自己修正をしていく。仁斎は、それをもとに、自分の仁愛に対して本当に相手が好意を持つてくれた瞬間に仁愛は二人の間で成立するんだと考えました。もつとも『孟

子』では、それで再三しても駄目だった場合は、相手は禽獸に等しいから放つておけっていうのですが（笑）。仁斎はそこで自分と他者の両方の視線を交わさせて、それによつて日常の中で自分の道徳のレベルを上げていくんだということを言っています。アダム・スミスが言つている、人への好意と、それに対する人からの反応を正確に測つていく目を持つということが似ています。三方よしもそうですね。

高坂 そうですね。

土田 ある意味ではかかる精神は世界的に通じている。

高坂 僕もそう思います。さつきちょっとと言つたように、中国で僕が三方よしについて話してもちゃんと理解してくれますからね。

土田 中国法制史研究で有名な滋賀秀三が言うには、中国では法と情と理の三つがそろうのが良い判断です。実は法の規程がそんなにそろつっていないから、実際の裁判では先例とかは参照されますが、裁

判官の裁量の幅が広い。そこで法以外にも情や理による説得性というのが重要なのです。原告と被告とそれを見る目の三つが納得するのが名判決とされます。単に法の機械的なあてはめではなくて、判断に説得力を持たせるためには情と理の理解、要するに人々の心を見通す裁判官の見識というのが必要なんですね。外面的な世間とは別のもつと内面に関わる世間性みたいなものを尊重するのが中国の思想の伝統にも本来あつたはずだと思うんですが、どうでしょうか。

渡辺 そうだと思いますね。

土田 中国で儒教をバックボーンにして商売をやっている人を儒商と称しますが、あれは本当にバックボーンを持つてやつてているんですか。（笑）

渡辺 それは日本のことでしょう。（笑）

土田 そうですね（笑）。後でそういう話にしちゃつているのかもしれません、日本の影響があるんですかね。

渡辺 かもしませんね。彼らと儒教について話したことも何回かありますけど、「何で渡辺はそんなに一生懸命に議論するの」という感じで（笑）。

がされていましたね。何でしたつけね。エンロンですか。

なに一生懸命に議論するの」という感じで（笑）。あまり関心を持つていませんね。

土田 そうですか。むしろ金もうけの方が好きなんですか。

渡辺 ええ。日本人が中国をそのように見てているだけ。

土田 儒商の祖は孔子の弟子の子貢だなんて言つて喜んでいるのは日本人の方かもしれない（笑）。

渡辺 プロレタリア文化大革命を論じた日本人が、全く別のアングルですけど、そういう中国の見方をしていたんじゃないですか。中国人は非常に道徳的で、思想的に聖哲であると。魂に触れる革命をやつておられるんだと。「渡辺、もつと愛情を持つてやつてくれ」と。日本人が日本人に対して言つてやつてくれたね（笑）。

土田 あれは中国型のせいというわけでもないんですか。

高坂 エンロン。それは失敗したわけですか。

高坂 大失敗。

土田 それはやはり中国的な発想だつたんですか。そういうわけでもないんですか。

高坂 そんなわけじゃないんでしようね。やっぱり自分が偉くなりたい。そのときは、エネルギー部門でエクソンを負かすぐらいの勢いだつたですし、丸紅なんかも何とか商売しようとアタックしていました。あのときは、エンロンはアメリカの企業倫理に関して最大の話題になりました。

土田 あれは中国型のせいというわけでもないんですか。

高坂 じやないと思いますけどね。

土田 中国というと、まずいことになると国がどんどん法律を変えてしまうような感じがしますけど

ね（笑）。

高坂 でも、アメリカも法律が多いですからね。

土田 渡辺先生はそこら辺はもつとシビアな例をいろいろご存じなんでしょうが。

渡辺 いやいや。

土田 他人のことはいいから日本がしつかりしろ

ということですかね。

高坂 そういうことですね。

渡辺 そうですね。共産党政権ですから、何でもできるんですよ。

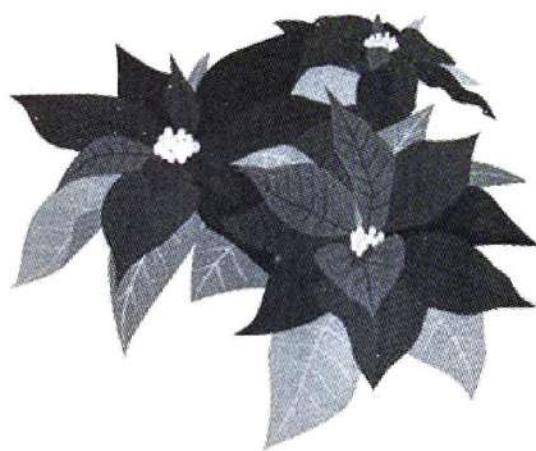
土田 中国は、行くたびに法律が変わっている感じがしますね。

渡辺 別に法律が治めている国じゃありませんから。党が治めているんですね。党幹部が治めているわけですから。

土田 まだお聞きしたいことがあります、時間が予定より超過しました。本日の鼎談の内容はたいへん多岐にわたりましたが、その中でも、経済も結

局は人が大事で、教育による人材の育成が急務だと
いうことが種々の視点から確認できたことが重要
だつたと思います。それではこれで鼎談を閉じたい
と思います。

（終）



出席者プロフィール

高坂 節三 先生

公益財団法人日本漢字能力検定協会代表理事・会長、公益社団法人日本弘道会理事、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事、下鴨神社執行役員・崇敬会理事、元東京都教育委員、元拓殖大学客員教授。

昭和十一年京都府生まれ。昭和三十四年京都大学経済学部卒業。

伊藤忠商事(株)入社。平成元年同社取締役・アメリカ会社執行副社長、平成五年同社常務取締役・中南米総支配人、平成七年栗田工業(株)専務取締役、平成十一年同社取締役会長、日揮(株)社外取締役を歴任。この間、経済同友会幹事、同会憲法問題調査会委員長等を務める。

渡辺 利夫 先生

拓殖大学顧問・元学長・総長。昭和十四年六月山梨県生まれ。昭和三十八年慶應義塾大学経済学部卒業、昭和四十五年同大学院経済学研究科博士課程満期退学。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学教授・学長、同大学総長を歴任。

外務省国際協力有識者会議前議長、第十七期日本学術会議会員、アジア政経学会元理事長。外務大臣表彰。正論大賞。

土田 健次郎 先生

早稲田大学名誉教授。中国社会文化学会会長。昭和二十四年東京生まれ。昭和四十八年早稲田大学第一文学部卒業、昭和五十三年同大学院博士課程文学研究科単位取得退学（東洋